特別寄稿

市民主体の追悼行事の意義　立木茂雄

現在の体験として生を与え続けるために

「市民による追悼行事を考える会」震災10周年記念誌に寄せられた50数本にのぼる寄稿文を読ませて頂いた。
震災に向き合い続けてこられた「これまでの10年間」のもつ重みが、市民のみなさんの一つひとつの活動から感じ取られ、厳粛な気持ちになっている。

そして、「わたしたちのこれから」にこめられたメッセージをどのように読み、感じ取り、意味づければ良いのかを考えている。
いくつかの大切なことばが、「これから」への思いに織り込まれていた。
たとえば、人と人とのつながりについて、である。「弱い者との共生」、「支え合い」、「ご恩返し」といった連帯につながる一連のことばが心に響いた。と同時に、つながりを通じて「自分たちでできることを自分たちでする」、「自治活動に、はちまきをしめて走り出した」とお聞きし、市民自治・自律のこころざしも、併せて感じ取った。

わがまちをつくること。それは追悼の思いを具現化する行為でもあった。「まちのお地蔵」や「まちの希望の灯り」が生まれた。皆で共に所有するものがまちに散りばめられることで「安全・安心なわがまち」が生まれるのだ、という知恵に触れた。

こころとからだを使う。毎朝のラジオ体操やウォーキングを続けることが、音のもつ癒しの力を信じることが、わたしの生活を回復させていく。今、生きていることを感謝することが追悼へとつながることを学んだ。

そなえる。精神的なことだけでなく、物的なそなえも推進する。「人は死なせない、けがをさせない、安全で安心な世界」をめざすことが、残されたわたしたちの使命であると改めて気づかされた。

行政との関わり方を考える。人が死なないようにする。生活や仕事を守る。そのために、自分ができること、みんなですること、そして行政がしなければならないこと、その3つをどのように組み合わせていけば良いのか。社会の仕組みを考え続けることが追悼の行為となることを知った。

価値観や人生観が変わった。物は壊れてしまう。でも震災でも壊すことのできなかったものがたくさんある。人の優しさや思いを共有すること、異なった立場や考えや国から来た人たちも仲間に受け入れていくこと。わたしたちの多くが、「その時から新しい生き方が始まった」という思いに駆られた。追悼は、「生かされている自分」を考えるきっかけとなった。

わたしたちは忘れない。そして伝えていきたい。亡くなられた方々のくやしさに報いたい。「わたくしごと」や「ひとごと」としてではなく、「わたしたちの記憶」として刻みつけたい。わたしたちが追悼するのは、忘れるためではなく、震災が常にわたしたちの中で生き続けていくようにするためなのだから。

つながりやまちについて語り、からだを動かし、こころを癒す。そなえを怠らず、自分ですること、みんなですること、行政がすることについて考える。このような一連の行為を通じて震災体験は常に再構築される。あの時は常に現在の体験として生が与えられるのだ。

生活復興の過程の中で追悼のもつ意味

阪神・淡路大震災で、復興の一番大きなテーマとなったのは生活再建だった。一口に生活再建といっても、その中身は、さまざまだった。

震災から5年目に神戸市民を対象にして実施した調査では、「すまい」を挙げた人が全体の3割、「人と人とのつながり」をあげた人が2・5割で、ほかの課題に比べて特に多くの意見を集めた。すまいあっての生活再建、そして、人が人として生きていくためには、まわりの人とつながりを持つことが大切であるということが、震災5年目に神戸市民が感じた生活再建の実感だった。

その後、10年目を前にした調査では、「人と人とのつながり」を挙げた人が一番多くなった。そして、つながりに加えて、「まちへの愛着」「そなえ」が再建の長期的な課題として浮かび上がった。また、10年という月日を経て、「人生観・価値観の変化」や「被災体験・教訓の発信」といった感情が新たに産まれてきたこともわかった（図1参照）。

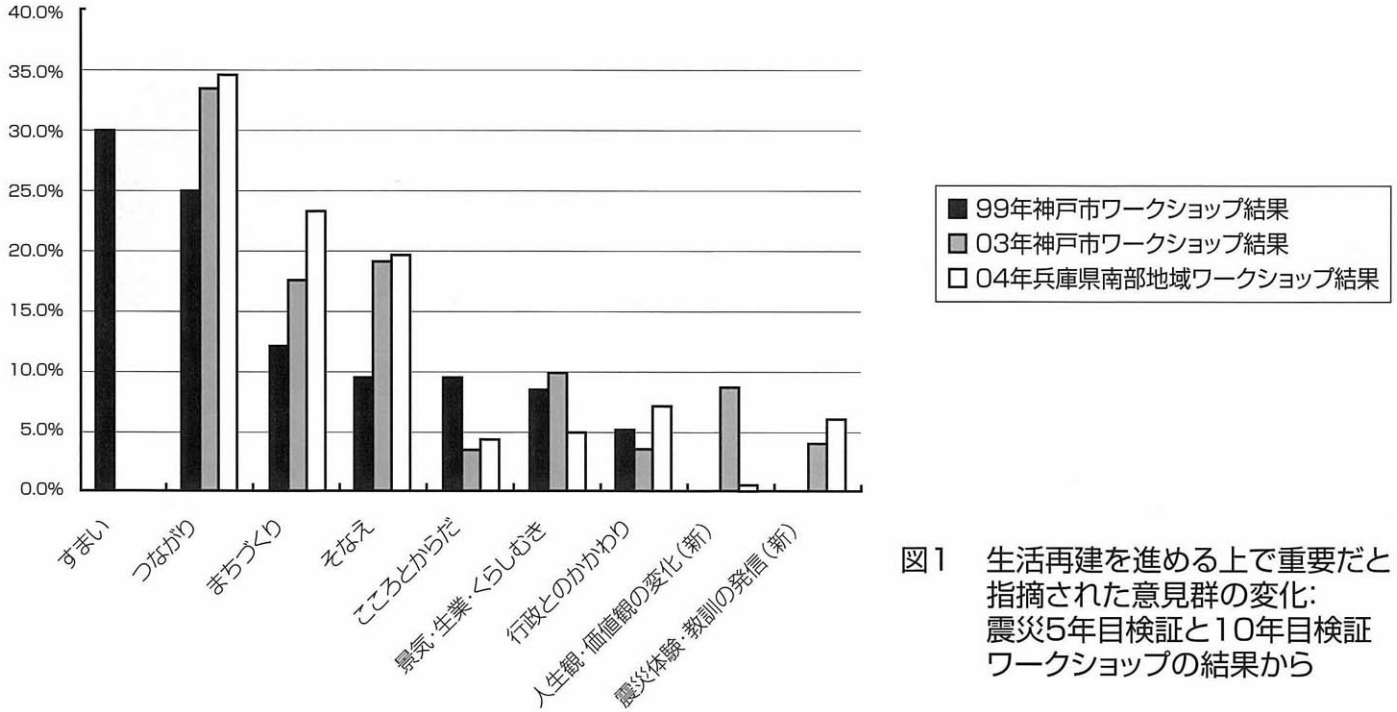

図1　生活再建を進める上で重要だと指摘された意見群の変化：震災5年目検証と10年目検証ワークショップの結果から

市民主体の追悼行事について考えた前節で語られた、つながり・まち・こころとからだ・そなえ・行政とのかかわり・人生観や価値観の変化・体験や教訓の発信は、人びとが震災から立ち直り、新しい安定を築いていく生活復興・生活再建の過程のなかで重要だと指摘されたことがらと、見事に一致することが明らかになった。なぜ市民主体の追悼が大切なのか。それは、追悼の行為そのものが人々の生活再建を進める行為でもあるからなのだということを上の図は示唆している。

さらに兵庫県で継続して行ってきた復興調査では、被災地の人たちが、生活を再建させて、復興するには、2通りの道筋があることがわかった。

ひとつは、「震災が起こる前と同じ幸せ」を回復すること。これは、「すまい」や「暮らしむき」が向上して、「心身のストレス」が低下することで、震災の影響や被害が緩和されるという道筋である。

もうひとつは、「新しい幸せ」を見つけ出そうとすること。これは、震災を体験したことを前向きに評価したうえで、一歩を踏み出そうということである。そのためには、震災を体験する前と比べて人生観や価値観が変化することが必要となる。ここでも多くの人が、家族や地域における「つながりの豊かさ」が変化の源になったものとして挙げていた。

震災10年記念誌に寄せられた50数本の寄稿文は、追悼が「新しい幸せ」を実現するための行為でもあることを、調査結果からも意味づけるものであった。

公共への市民の参画・協働の芽生え

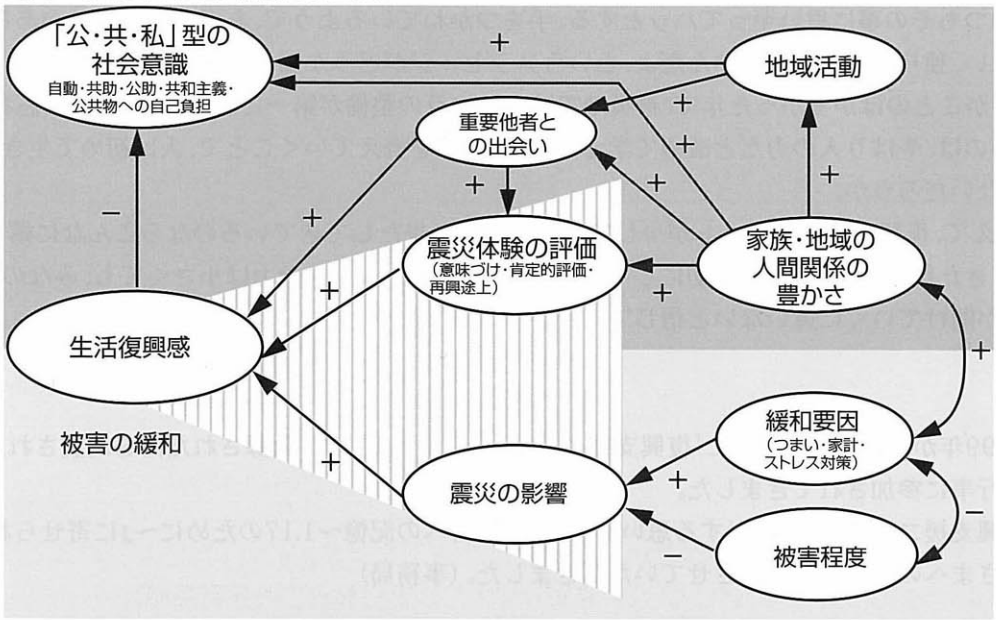

図2　生活復興過程の鳥瞰図（2003年生活復興調査結果の概要）

よりよい明日に向けて　竹下景子

久しぶりにアルバムを開いてみた。幼稚園のスモックを着て遊んでいる、あどけない息子がいた。今では見違えるほど背が伸びて、ニキビの花咲く高校生。夫も私も白髪ひとつない若い父親、母親だった。「95年1月」の日付。今日までの年月に家族の軌跡が重なった。

あの日から、10年。当時、テレビや新聞で震災の模様が伝えられるたび、被害の大きさいたましさに胸のつぶれる思いがした。震災直後に、芦屋に転勤していた従兄弟家族に電話をしたのだけれど、つながったのはそれから3日後。撮影所の一角の公衆電話で「モシモシ」と呼びかけようとしたそのとき、受話器の向こうからけたたましいサイレンの音が飛び込んできて、今の自分とはひどくかけ離れた緊迫した現実を前に、その場で立ちすくんでしまったのを覚えている。

その後、やはり市や在住(当時)の友人でピアニスト、作曲家でもある林晶彦さんから復興支援のコンサートに協力してほしいと依頼を受けた。どこで起きても不思議ではない大地震と聞いた以上とても他人事とは思えない、即、参加を決めた。私に何ができるのか、どこまでやれるか見当もつかなかったけれど、とてもジッとなどしていられなかった。

150通余り寄せられた応募作品の中から選ばれた詩を、林さんのピアノの即興演奏にのせて朗読する。そのうちの何編かは林さんの作曲で歌にもなった。声を合わせて全員で唄った。

林さんを始め、コンサートのスタッフも被災者だ。応募し下さった方も、そして会場のお客様も思いは同じ。私はあらかじめ作者の作品への思いを聞いてから朗読するのだが、厳しく辛いご自身の体験の前に、私の貧弱な想像力などはいっぺんに吹き飛んでしまう。一つ一つの言葉の重さ、悲しみの深さに圧倒されて、朗読の途中、涙で声が幾度も途切れた。でもそんな私の背中をそっと後押ししてくれるのは、他でもない会場の皆さんなのだった。どの人も全身で聴いて下さっているのが分かる。こんなにひとつになれる音楽会を私は他に知らない。

9年目、6回のコンサートを経験して思うのは、新しい出会いの場が気持ちを共有できる温かなふれあいの場に育ちつつあるということだ。応募がきっかけになって、以来毎年会場を訪れて下さる方がいる。一年ぶりの再会が明日への元気を運んでくる。私も神戸の「ともだちの輪」が広がった。ちょっとした同窓会のようでもある。元気をもらっているのは今では私の方。作品の内容も、現実を直視したものから、未来に向けて希望をうたったものが増えてきたように思う。

そして、その一方で、被災された方々の苦しみや痛みは、歳月を経ても決して拭い去れないという事実を教えられた。失ったものの大きさを慮れば、当たり前だろう。日常の笑顔を取り戻しても、その奥底には決して癒えない深い悲しみの湖がある。朗読する時いつもその事に思い至ってハッとする。手をつかねているようで、もどかしい自分があるけれど、でも、決して独りじゃない、独りぼっちじゃないんだよ、というメッセージがどうか届いて欲しいと祈るような思いでいる。

2004年は自然災害がことのほか多かった年で、被災地ではインフラの整備が第一に急がれる。けれど忘れてならないのが、人の命を救えるのは、やはり人の力だと改めて学んだ。互いに手を携えていくことで、人は初めて生きる力を見出すことができるのではないだろうか。

10年目の節目を迎えて、復興支援コンサートが少しでもその役目を果たしてきているのならこんなに嬉しいことはないし、今日まで培ってきた絆を、これからも大切にしていきたいと思う。一人一人の力は小さくても、みなの力が集れば、きっとより良い明日が開けていくに違いないと信じて。

(2004.12.3)

付記

竹下景子さんは1999年から毎年1月17日に「復興支援コンサート」に出演され、公募された詩を朗読されたり、トークに出演されるなど追悼行事に参加されてきました。

今回、ご自身の「復興支援コンサート」に対する思いを『詩集　明日への記憶～1.17のために～』に寄せられ、追悼行事に関わってこられた皆さまへのメッセージとさせていただきました。(事務局)